

■坂本和久さんのリスニングルームについて

部屋自体が音楽的に“鳴る”、スピーカーから音が走る設計思想を具現化

部屋の奥行き、横幅、高さといった要素からコンクリートの壁の基本的な厚みに対して、さらに厚くして低音のエネルギーに対抗する部分(スピーカー背後の2本の柱状の部分)や、写真では見えないが30×10mmの溝を設定して、余分な振動を逃がすところまで、貝崎静雄氏のノウハウをすべて投入した部屋だ。部屋の形自体もそうだが、音楽で言うと「ド」と「ソ」の関係(いわゆるパワーコード)をたくさん作ることによって、部屋自体が音楽的に“鳴る”ことを考えている。それは左右の壁の表面に施工されたそれ

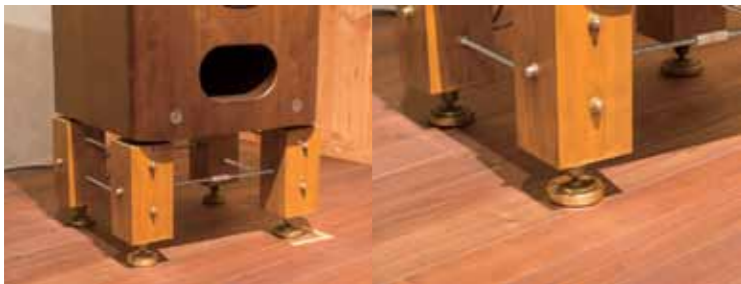
自体が音響板的に機能する壁の作り方(下側が840cm、上側が1680cm)にも踏襲。また、天井に設置された丸太の一部は、実は神社での役目の終わった御柱を流用。音を走らせるためのもので、山田邸でもそのエネルギーを高める能力には瞠目させられている。根太(ねだ。床の下の構造体の部分)の入れ方も、スピーカーからの音を前後に走らせるような設計思想。詳しくは次の機会に紹介したい。(鈴木 裕)



正面にあるコンクリートの2本の柱状の部分は坂本さんのリスニングルームの基となっている部分。部屋全体が200cm厚のコンクリートで構成されているのに対し、この部分はさらに厚くしてある



部屋の両サイドには、ローゼンクランツ特製の音響パネルを設置。高さは上が1680mmで下が840mmと倍音の構成になっていて、上下の間と床との接合部には幅木を配してある。オクターブ和音で構成された各パネルが運動調和し、音楽エネルギーとしてリスナーの方向に流れるように工夫が施されている



スピーカースタンドは集成材で作成。壁面と同じ寸法比で作られており、脚部は同社のスパイク「Giant Spike / Gen2」(¥15,000 / 1個)と、スパイク受けインシュレーター「Giant Base」(¥33,000 / 1個)の組み合わせで構成

貝崎氏によってプロデュースされた部屋はいくつかあるが、その先行開発の役目を担っているのが、これまでanalog誌の本連載にて第1回目から紹介してきた北志賀の山田さんのオーディオルーム。そして今回紹介するのがその山田邸と対極的な、東京都内に居を構える坂本和久さんの部屋だ。対極的というのは、そもそも建築物として対照的な造りで、それぞれに対応したチューニングが施されているからだ。山田邸のオーディオルームはもともと車庫で、構造体としての剛性・強度は高くない。壁や天井は板材で構成され、その板自体も薄めだ。率直に言

って、オーディオ用としては難しい部屋だ。その音が旨くましく改善されつつあるのは以前にもリポートした。それに対して坂本邸の部屋は、構造体自体がしっかりとしたコンクリート製であり、新築であり(耐震強度なども高い一軒家だ)、そもそも家自体の設計段階からオーディオを鳴らすことが考えられている(部屋の詳細は別項を参照)。

同社のアクセサリによる部屋とシステムの進化を辿る

いやしかしオーディオは恐ろしい。これだけサラブレッドのような出自を持つ部屋なのに、筆者が坂本邸を訪れて最初に聴かせてもらった音は大変恐縮ながら芳しくなかった。打てば響くような、と形容したい部屋であるがゆえに、スピーカーから出る音が芳しくないと、その芳しくない音が増幅されてしまっていたのかもしれない。

そこで今回は、坂本邸のその状態のオーディオシステムにローゼンクランツのオーディオアクセサリ類、電源ケーブルや信号ケーブル、インシュレーター、そして特注のスピーカーシステムなどを投入することによって、どう音が良くなったのか。これをなるべく客観的にリポートしてみたい。



坂本和久さん(東京都在住)
Kazuhisa Sakamoto

注目連載

オーディオアスリート

●レポート
鈴木 裕
Yutaka Suzuki
Photo by 君嶋寛慶

クルマとオーディオによるカイザー・チューニングの世界⑥

ローゼンクランツが提唱するリスニングルームを紹介

20世紀の2大工業製品といえるクルマとオーディオはその原理や仕組みの上で、共通する要素は非常に多い。そこで本企画はカイザーサウンドが手掛けるサウンドクリニックを、同社が「オートローゼン」というブランド名で実践しているクルマのチューニングに例えながら解説していくもの。これまでの全5回は姉妹誌である『季刊・analog』でお届けしてきたが、ルームチューニングやアクセサリの実践編に移っていくにあたり、本誌へ引越しを行った。レポートは引き続き鈴木 裕氏が担当。連載タイトルの“オーディオアスリート”も自身が「オーディオ」「音楽」「クルマ」をまさに自らの体で体験してきた人物であることから命名したものである。さて、第6回目は、ローゼンクランツが提唱するリスニングルームとして、坂本さん宅をご紹介しますことにしよう。

「振動」「電源」「気流」の3つの要素が時間軸となる

オーディオをセッティングする極意。ローゼンクランツを主宰する貝崎静雄氏はこの極意について「振動」「電気」「気流」という3つの要素の時間軸であると語る。その3つのタイミングとか、協調してとか、お互いに高め合う、といった要素を大事にしている。

オーディオ機器と部屋自体の関係にもそれはあてはまる。演奏者という名前の、まさにプレーヤーによって音楽が再生され、それをアンプで増幅。スピーカーを駆動するわけだが、いったん音楽が鳴り始めると、部屋の中の空気も部屋自体も振動する。ローゼンクランツの場合、その関係がうまくいくと、まるで部屋がスピーカーからの音を引き出す能力を持ってしまったかのように感じるほどだ。貝崎氏の言葉を言えば「音が走り」だす。それがローゼンクランツの真骨頂にも感じる。

オーディオ専用設計した新築ルームをチューニング

そうしたアクセサリ類の素材や構造、作動原理よりも、現象としてどう音が変化したかに注目する。まず坂本さんのシステムを簡単に紹介しておこう。スピーカーはダイヤトーン/2S-13003。90年代のスピーカーだがウーファーは32cm径の、しかもアラミドハニカム振動板を硬く編んだ振動板。トゥイーターは5cm径のコーン型で、振動板にはビュアポロンB4Cを採用している。高解像度を目指した、手ごわいスピーカーだ。CDトランスポートはワディア/WT12000S。そこからのデジタル信号をUSBDACであるインヴィクタ/MIRUSでD/A変換。そのアナログ出力をエルサウンドのパスシプアツテネーターを通してパワーアンプ、パストラボ/X350に送りこんでいる。

●ステップ0

「元の音」

音像感がない状態で定位も漠然としている

低音が茫洋として音像感がなく、定位も漠然としている。音色的には中高域のクリアさはあるが、それが妙にしゃしゃり出て、はしゃいでいるようにも聞こえる。



リスニングルームの後方は階段になっており、この部分の壁にも音響パネルを正確な寸法比で設置。左右面も含めて、これらはすべて部材のみを購入して、坂本さん自身が取り付けしている

ローゼンクランツの製品によって 部屋全体が鳴り出すような感覚に変貌

圧倒的な変化量と向上度
部屋全体が鳴り出す感覚

●ステップ8

「スピーカーの下のスパイク受けを巨大なものに交換する」

●ステップ7

「電源にひと工夫してみる」

壁コンセントに並列型電源フィルターを挿してみる。再生音の変化量は大きくないが、ブラインドテストでもわかる程度にSN感が良くなる。また、音の肉付き、低域の太さが出てくるのも美点。都会の電源事情の悪さをあらためて確認させられる。

「スピーカーの下のスパイク受けを巨大なものに交換する」

●ステップ9

「DACの電源ケーブルをグレードアップ」

●ステップ10

「人間性までも伝わってくる正確でゴージャスな再現性」

スピーカー台の下のスパイク受けを直径43・8mmの「Captain」から直径72・74mmの「Giant Base ASE」に交換。この変化量、そして向上度は圧倒的だった。高域、中域、低域のそれぞれの立ち上がるタイミングが揃う印象で、俄然、音の鳴りっぷりが良くなる。全体的に太い音で、やわらかさや余裕も出てくるし、ローゼンクランツの製品によってプロデュースされた部屋全体が鳴り出す感覚がある。それを聴いて貝崎氏がスピーカーの角度や位置をすこしだけいじると、さらにエネルギーが増し、スピーカーからの音離れも良くなっている。

ひとつ前の状態のまま、DACの電源をケーブルだけを最上位である「Versatile」に交換する。この電源ケーブルは筆者の自宅でもテストしたことがあるが、芳醇で音の色彩感が豊か、語弊を恐れずいえばゴージャスな音色感を持った再生音に到達してしまふ。音のエネルギーの総量が大きくなり、音場空間も拡大。と言ってもヴォーカリストやミュージシャンが別の人間性までも伝わってくる

●ステップ11

「人間性までも伝わってくる正確でゴージャスな再現性」

●ステップ12

「部屋がスピーカーから音を引き出すような感覚」

以上、各ケーブル類についての概要としては、線材をあえて途中でカットしてハンダ付けするなど、音楽エネルギーのタメやタイミングを加速するように設計されているという。それは机上の設計だけでなく何百本もの試作品を作った上での製品で、実際にその試作品の一部を見せてもらったこともある。膨大な開発の上に到達したクオリティに感じられた。



写真左はパワーアンプに使用したRosenkranzの電源ケーブル「AC#2 Versatile」と、右はDACに使用した上位モデル「AC #4 Versatile」



エルサウンドのバッシュアッテネーターとバスラボのパワーアンプ「X350」の間に使用している同社のXLRインターコネクトケーブル「XLR #2 Versatile」



ケーブルの試作研究は写真のように膨大な数と量になる。データをとり終えた後に全ては廃棄処分となる

●「ローゼンクランツ」および「オートローゼン」の問い合わせ先
カイザーサウンド(有)
TEL: 03-3643-1236 / FAX: 03-3643-1237
Rosenkranzホームページ:
http://www.rosenkranz-jp.com/japanese_index.html
Auto Rosenのホームページ <http://autorosen.jp/>

「スピーカー台を交換」

「スピーカー台を交換」

●ステップ2

「スピーカー台を交換」

「スピーカー台を交換」

●ステップ3

「スピーカーの下を大型スパイク十スパイク受けに交換」

●ステップ4

「アッテネーターとパワーアンプ間の信号ケーブルを交換」

「アッテネーターとパワーアンプ間の信号ケーブルを交換」

●ステップ5

「同じくアッテネーターとパワーアンプ間の信号ケーブルをさらに良いものに交換」

●ステップ6

「DACとアッテネーターの間の信号ケーブルも良いものに交換」

「DACとアッテネーターの間に「#1」

●ステップ7

「DACとアッテネーターの間に「#1」

●ステップ8

「DACとアッテネーターの間に「#1」

「DACとアッテネーターの間の信号ケーブルも良いものに交換」

●ステップ9

「DACとアッテネーターの間に「#1」

●ステップ10

「DACとアッテネーターの間に「#1」

「DACとアッテネーターの間に「#1」

●ステップ11

「DACとアッテネーターの間に「#1」

●ステップ12

「DACとアッテネーターの間に「#1」



本項で登場する Rosenkranz製品

Rosenkranzのスパイク受けインシュレーター。写真左から「PB-POINT BASIE」(直径35mm×高さ11.67mm/¥4,700・1個)、「Captain」(直径43.8mm×高さ21mm/¥19,000・1個)、最高峰の「Giant Base」(直径72.74mm×高さ24.84mm/¥33,000・1個)※すべて税別価格



スピーカーとスタンドの間には、フェラーリF599のチューニングから生まれたホームオーディオ用のインシュレーター「PB-599」(¥15,000/1個・税別)が設置されている

スピーカー台の脚まわりとして、最高の結果を引き出した同社のスパイク「Giant Spike/Gen2」(¥15,000/1個)と、スパイク受けインシュレーター「Giant Base」(¥33,000/1個)の組み合わせ ※ともに税別価格

